

新たな実践を進めていくためには訓練と調査研究が必要である／初回エピソード精神病とオープンダイアログ（ケース1・ケース2）／新たな実践は可能である

根拠に基づいた研究（Evidence-Based Research）と研究デザインの画一化／説明モデルばかりではなく記述的研究を／比較対照試験は管理的文化の産物である／広場（agoras）と文脈性／広場で実践を学び広める

エピソード——エンパワメントに向けて 198

文献 207

訳者あとがき 218

イントロダクション

——ネットワークとダイアログについて

人は社会的関係の中で生きている。専門家であっても、そのような関係に個別にかかわっている。専門家とクライアントが1対1で会っていても、クライアントには個人的なネットワークがあり、クライアントはこの出会いに先立って自分のネットワークに包摂されているのである。これは専門家ネットワークでも同様である。パーソナル・ネットワークと専門家ネットワークは、ソーシャル・ネットワークの一部である。個人は、社会的アイデンティティを維持するための関係や、精神的・物質的な支えや情報、あるいは新たな関係を得るためにさまざまなやり方でつながっている。

クライアントに身近な人たちのことを尋ねるとき、そうした人たちはクライアントの内的対話を通じて会話に参加する。そして、そうした人たちについて問われなくても、彼らの〈声〉はそこにこだましているのである。一つひとつの問いやコメントが、私たちの対話にさまざまな他者の声を付け加える。ネットワークに関心がなくても、クライアントの人生において重要な人たちについて尋ねたりコメントしたりすれば、関係の中にネットワークがあらわれるのである。私たちの話し方は、クライアントの内的対話と、クライアントとその身近な人たちとのあいだでの対話の両方に影響を与える。

クライアントはまた、自分たちが接触している他の専門家たちを会話に巻き込む。クライアントの言葉にコメントしたり、彼の状況について問うならば、私たちは他の専門家ネットワークに対しても話しかけていることになるのだ。まず、クライアントは私たちが言ったことと他の専門家の誰かが言ったことを

比べることであいだに立つ。クライアントは仲介者となる。他の専門家たちもまた内的対話を行うので、私たちの経験とそれらの専門家の経験が響き合うことになる。それゆえ、たった2人であっても、対話する者たちは関係のネットワークをつくっているのだ。私たちはこうした関係をいつも、会話の中での他者の声に影響されながら作りあげているのである。本書では、こうした人たちが現実（対話）に参加する仕方を紹介する。

専門家の仕事は、他の援助者が行っていることややってきたこととつながっている。現代社会では、私たちは新生児期、幼児期には幼児として、就学年齢期には青少年やヤングアダルトとして、中年期においては勤労者・扶養者として、そして高齢者として、行政機関や行政サービス、およびその制度とかかわりをもっている。この世に暮らす限り、人間関係の網の目の外で生きることはできないし、専門的システムにお世話にならない人はいない。

専門家ネットワークは、そのネットワークが行う活動によっても具体的なものになっていく。私たちの専門的手段は、その他の専門家の手段とつながっている。それは互いに補い合ったり、食い違ったりする。特に、輪郭のはっきりしない問題であるほど、さまざまな機関からの多くの専門家がクライアントや家族にかかわることになる。心理社会的支援では、多様な援助者がかわる状況のほうが普通である。

ソーシャル・ネットワークを援助や支援にアクセスするための結び目と考えるならば、心理社会的支援では、あらゆる専門家は既にネットワークとして機能している。このような意味で、どんな心理社会的支援もネットワークに基づいているのである。ネットワークでやるかやらないかではなく、どのように行うかが問題なのである。

難しい状況で互いの境界を越えて行う仕事は、決して楽ではない。ネットワークが行き詰ってしまうこともあれば、皆が思ってもいなかった結果が生じることもある。しかしながら、実践をシステムティックに進めようとしながら、境界を越えて行う仕事の複雑さに対してはほとんど注意が払われていない。そんなことをしなくても多面的な協働作業は自然に生まれるものだ、とすら思われている。個人あるいはチームでの仕事で行う技法やアプローチ、訓練がさまざまに存在する一方で、さまざまな立場の専門家が関与する状況に対処する方

法はまだ十分に活用されていない。

本書は、心理社会的支援における、パーソナル・ネットワークと専門家ネットワークの出会いに焦点を当て、そうした出会いをどのように対話的なものにするかということを検討する。ネットワークづくりは、少なくとも30年にわたってセラピーとソーシャルワークにおけるトピックであった。対話的アプローチは、個人療法と集団療法、教育やカウンセリングのいくつかの流派でとりあげられてきた。しかし、ネットワーク間の対話はあまり検討されてこなかった。分析や研究が行われていないのだ。

困難な状況について議論し対処するために何人かの関係者が集まった際に、誰かひとりが問題となっている事態をコントロールすることは難しい。厄介な状況の中、不確実でコントロールの欠如した場で耐え忍ぶことは難しいことなのである。そのために、モノローグ的な語りへの誘惑が大きくなるのである。しかし、それは相手の思考や行動を支配することになるのだ。

ミハイル・バフチン (Bakhtin, 1981) は、権威主義的な発話は、相手がその発話を認めて彼自身の発話であると思いつくことを要求する閉ざされたものだとして指摘した。それに対して、〈対話〉は開かれている。〈意味〉は互いに応じ合いながら生成し、変化する。より多くの〈声〉が参加したポリフォニックな（多声的な）対話になるにつれ、新たな理解が生じる可能性が広がっていく。〈対話〉は共に考える手段であり、そこでの理解は、ひとりの人間の可能性を超え出るものとして、参加者のあいだで形づくられる。こうしたことを達成するためには、参加者が耳を傾け、相手に届くような応答をする必要がある。

危機が生じたり、不安が高まったり、多くの立場からなる関係者のネットワークが行き詰ったり、クライアントが不満をおぼえたり、その家族がかかわってきたり、専門家が互いを非難し合うような時は、一見すると対話のプロセスがうまくいっていない時である。しかしながら、私たちの経験では、まさしくこうした状況でこそが、対話が必要とされ、それが最も力を発揮するのである。次の第1章では、ネットワーク状況における対話的出会いの前提条件について検討し、「ダイアログの思想」(dialogism)の本質的次元を明らかにしたい。

心理社会的仕事におけるネットワークとは境界の垣根を越えることである

1970年代から、ネットワークは心理療法とソーシャルワークの分野で話題になってきた。ネットワークをめざすさまざまな実践がつくられてきた。「ネットワークづくり」は、教育やカウンセリング、リハビリテーションなど心理社会的支援に関する他の領域でもスローガンになっていた。ネットワークというメタファーは、グローバル・ビジネスから情報技術まで、物流からニューロンまで、さらには人間関係から社会資本まで、種々雑多な分野で用いられている。マヌエル・カステル (Manuel Castells, 1996) は、私たちは「ネットワーク社会」に生きていると述べている。

ブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour, 1996) によれば、あらゆるネットワークには、いくつかの明らかな共通した特性がある。キーワードは「結び目」である。ネットワークは、単純な結びつきから高度な結びつきへと変容するし、その逆もありうる。また、アンドリュー・バリー (Andrew Barry, 2001) は、ネットワーク概念は単に「現実にある」何かをあらわすために用いられているのではないと指摘している。私たちは、その概念を用いて熟考すれば現実を新たな目で見直すことができる。ネットワークという言葉で思考すれば、ネットワークを使って活動することになる。

ジョン・バーンズ (John Barnes, 1954) は、ソーシャル・ネットワーク概念の生みの親と呼ばれるにふさわしい。彼はノルウェーの村について研究を行った。そして、複雑な社会階層や家族境界を、ソーシャル・ネットワークをつくりあげる結び目をもった糸とみなして、それらをたどれば社会的関係を理解できることを明らかにした。ロス・スペック (Ross Speck) とキャロライン・アトニーヴ (Carolyn Attneave) は、心理社会的支援の分野では、ネットワーク研究のパイオニアである。彼らはソーシャル・ネットワークにおけるリソースを結びつける方法である「ネットワーク・セラピー」を開発した。

ネットワークは、いつも同じものではない。人々のプライベート/パーソナル・ネットワーク、すなわち家族や大家族、親密なコミュニティ、仕事のコミュニティなどは変化しうる。ジョン・バーンズ (Barnes, 1972) は、彼がつくった「ソーシャル・ネットワーク」の概念は、これまで流行したさまざまな概念と同じように消え去るものだろうと言ったが、今のところそのようなこと

は起こっていない。この概念は、私たちの目を「結びつき」にうまく向けさせてくれるが、結びつき自体を定義するという点に関してはまだまだ曖昧なままである。たとえば、家族は常に変容していて、正確に定義するにはあいまいなものである。「家族」の意味は、さまざまな文化において同じものではないし、時と共に変化するものである。大家族、親類、地域コミュニティの意義もまた変化するし、仕事のコミュニティや関係もまた変化する。いつでも、社会的支援とコントロールを行うところは常に変化している。個人は今や、伝統的制約からすると前例のない自由を享受している。しかし同時に、人びとはかつてないほどに伝統的支えとは疎遠になってしまった。だが、このような事態の最中でもソーシャル・ネットワーク概念は生きているし、機能している。定義が曖昧であるがゆえに、この概念はかえって社会の移り変わりの中で生き残ったのかもしれない。同時に、ソーシャル・ネットワークは今日では、1950年代にそうであったものではない。たとえば、ノルウェーの漁村においてそうであったものでもない。しかし、後期近代もしくはポストモダンにおける個人化の過程 (つまり、個人と社会のあいだの変化しつつある関係) の中であっても、人間関係の織糸をうまくたどれば、昔ながらの人間関係のリソースを発見できるし、そうすることには意味があるのだ。

根本的に変容しつつあるソーシャル・ネットワークのひとつの側面に、専門家による援助というものがある。1950年代には、現代とは違って、分化した高度な専門的知識をもつ細分化された心理社会的専門家システムはなかった。第2次世界大戦後、健康や教育、福祉やその他のサービスが大規模に求められるようになった。個人的な技能によって行われてきた健康管理、教育、その他のサービスは、マシプロ化した機関にとってかわられ、より深く専門化することで機能している。これらは、細分化された「サイロ・システム」となった。それぞれのシステムには活動組織や専門家群が別々に存在している。それぞれの部門は、それぞれ運営組織や財政部門をもち、従来あった水平的な構造を失ってしまった。

こうして、支援が細分化されてしまったために、その境界の垣根を越えたり、「柔軟なネットワーク」(Castells, 1996を参照)をつくる必要性が高まってきた。そのためには、各サイロの結果を別々に見るのではなく、全体の結果を見渡さ

なければならないと言われはじめたのである。ネットワーク・ダイアログが求められてきた大きな背景には、市民の日常生活世界と細分化された専門家システムとの出会いがあるのだ。細分化された組織は、個人化というポストモダンの問題に対処しようとしている。専門家が境界を越えてクライアントに手を差し伸べるにはどうすればよいのだろうか。専門家システムの内部において、そしてクライアントおよびそのパーソナル・ネットワークに対して、どうすればさまざまなリソースを結びつけることができるのだろうか。

互いに他の領域をうまく補完し合っている専門家システムがあれば、それは最適であろう。そのようなシステムであれば、専門家はさらなる専門的知識が必要な時には、誰に連絡をとればよいか分かる。だが、責任の所在が不明であったり、たらい回しのやりとりで無駄に動き回り、何をすべきかを相手に押し付けてばかりいる最悪のシステムもある。そうしているうちに、援助を求めている人たちは、たいていはどんどん具合が悪くなってしまう。良いシステムでは、専門家が支援と助言を与える。だがひどいシステムにあたれば、クライアントは話を聞いてもらえず、一方的にひどい決めつけをされ、クライアントにはそぐわない対策がとられたり、とんでもない方向へと引きずっていかれてしまうのだ。

境界の垣根を越えることは、専門家システムのあいだでも、専門家と非専門家のあいだにおいても必要である。これらの次元は溶け合うのだ。患者のプライベート・ネットワークがミーティングに招き入れられるのは、彼らを治療するためではなくて、彼らから助けや支援をもらうためである。彼らの〈声〉は、混乱した状況についての相互的理解をつくりあげるために必要なのである。このような場合には、専門家といわゆる素人のあいだにはっきりとした線引きをすることは困難である。もちろん、医者は医者であり、心理士は心理士であり、ソーシャルワーカーはソーシャルワーカーであることは言うまでもない。彼らの専門的知識 (expertise) は、境界の垣根を越えてしまうからといって役立たずになるわけではない。しかしながら、〈対話〉においては、治療は専門家たちだけに担われるのではない。実際には、「素人」であるパーソナル・ネットワークが専門家たちのリソースに上乘せされるのである。心理的危機やその他のこうした困難な状況は、クライアントだけに関係するのではない。それ

はまた、クライアントの身近な人びとにも関係している。相互的対話においては、ひとつの立場からでは見えなかったり、うまくできなかったような理解をつくりだすことが可能となる。その結果、クライアントのプライベート・ネットワークは治療におけるリソースやそのプロセスを一緒に担い合うことになる。ネットワークが出会ったとき、「皆が共有できる特別な知 (shared expertise)」が生まれうるのである¹⁾。そのような知識は、ひとりだけで獲得できるようなものではない。

私たちは二十数年にわたって、ネットワーク・ダイアログの研究を深めてきた。ヤーコは精神科ケアの領域で働き、トムは社会福祉関連の領域で子どもや青少年、その家族と多様な専門家にかかわりながら研究してきた。本書では、オープンダイアログという、ヤーコたちによってつくりあげられてきた方法と、未来語りのダイアログという、トムたちによってつくりあげられてきた方法について説明したい。対話的アプローチは他にもあって追究が行われている。だが、私たちはダイアログの思想の特性についてより広く考察するために、私たち自身の経験したものを語ろうと思う。「ダイアログの思想」は、一般論としてあるわけではない。それは、実際の活動の中に埋まっているものなので、私たちの研究のバックグラウンドとなっている実践を詳細に記述しようと思うのだ。何よりも、私たちが実践についてしゃべるよりも、自分たちで対話すること自体が実践を豊かにするだろう。それがどのようなものであるかということは、実際に自分自身の実践として取り組んで経験した人へのみ、わかるのである。

本書にはさまざまな方法やテクニックが書かれているが、それらは教則的マニュアルではない。私たちは、「ダイアログの思想」とは思考と行動の方法だと考えている。「ダイアログの思想」は、これから一緒に学び考えていくあらゆる種類の方法やテクニックを豊かなものにしてくれるだろう。本書の後半では、私たちは研究について、ネットワーク・ダイアログの効果をどのように評価するか、この仕事をさらに進めるためにその評価をどのように利用するのかという研究を紹介する。